

哲学における直観使用

－思考実験の際の概念把握を手掛かりに－

菊池 ゆとり

哲学では、直観というものが大きな役割をはたしている。本稿では、そのような直観というものがいったい何なのか、直感や第六感、勘などと何が異なっているのか、そして特に哲学の思考実験で使用することが妥当なのかどうかについて検討する。本論文では、近年英米圏で隆盛を見せている哲学運動、実験哲学(experimental philosophy)のいくつかの議論のうち、実験的制限主義に着目する。そもそも、哲学界では、反証的均衡法(直観がある哲学的理論に合致しなければその理論が棄却されること)による正当化という枠組みそのものに疑問を提起するものは従来から存在していたが、哲学的直観の証拠としての妥当性は実験的制限主義者が批判するまでほとんど批判の対象とされてこなかった。以上のような状況を受け、思考実験で本当に哲学的直観が使用不能なのかについて検討を行う。上述した実験的制限主義の主張と、それへの批判を概観し、Wittgenstein の思考実験を例に使用し、実験的制限主義への批判を試みる。

調査方法は、主に文献調査である。現代の実験哲学の論文のうち、最も基礎的であるといわれているものや、研究の最前線にあるものを選定し、実験的制限主義の主張とその批判について概略し、思考実験の際の直観使用の適切性を検討するために Wittgenstein の思考実験を例にして考察する。

本論文では、まず第 1 章目的と動機を示し、第 2 章で議論のために必要な用語の定義を示した。そして第 3 章では基本的な実験哲学の文献を用いて実験的制限主義について、第 4 章で最前線の文献を用いてその批判についてまとめ、そしてそれを踏まえて第 5 章では Wittgenstein の著作や研究書を用いて Wittgenstein の思考実験の例をいくつか提示し、それをもとに第 6 章で考察を進めた。

考察では、Dennet、Hofstadter(1984)の「直観ポンプ」の理論を用い、Wittgenstein の「カブトムシのケース」の条件を変更し、思考実験の落とし穴を指摘した。そして、この落とし穴を、実験参加者の概念把握の問題視の観点から、概念把握の差によって説明できるとした。さらに実例を使って、実験的制限主義者による再批判の論点が不適切であることを指摘し、概念間の調整に何が必要なのかを示した。思考実験の際の正しい直観使用に必要なのは、思考実験に参加する人の概念把握を共通にすることであるということが明らかになった。

(指導教員 横山幹子)